

〈論 文〉

「長野縣方言對照表」(明治三二年)とその語彙について

大橋 敦夫

はじめに

明治三二(一八八九)年に、長野県小縣(ちいさがた)郡丸子学校校長・柴崎虎五郎によって作成された「長野縣方言對照表」(架蔵・以下「表」と略記)の語彙について検討する。

本資料については、管見では、これまでの長野県方言研究史で取り上げられたことがない。そこで、資料の紹介(翻刻・後掲)を行なったのち、語彙の検討に移ることとする。

一、柴崎虎五郎の生涯と業績

まず、「表」の作成者・柴崎虎五郎について、『長野県歴史人物大事典』(郷土出版社 平成二年七月)の記述を次に引用する。

柴崎虎五郎 しばざき・とらごろう

教育者、実業教育実践者。一八六〇(万延一)〜一九二六年(大正一五)。小県郡殿城村(現上田市)に生まれる。長野県師範学校第一期(一八七七)、第二期、第三期(一八八〇)を卒業、その間殿城村修道学校に勤務、一八八一年(明治一四)から訓導として丸子学校(旧整信学校)に勤め、校長に就任、その間、小県高等小学校訓導を兼任している。農村の副業として機業染色の普及を思い立った柴崎は、丸子町で桐生足利から講師を招いて女子青年に講習を行い、隣村の武石尋常高等小学校長保科百助(五無齋)がこれに共鳴し、しだいに郡下に広まった。上水内郡大豆島尋常高等小学校長に転任した保科とともに信濃教育会に提言して、全県下に機業染色を普及するために指導者講習会の開設を働きかけた。機

業地の群馬県桐生、栃木県足利を視察し、東京工業学校を訪

問して講師の交渉と講習用具の調達に当たった。信濃教育
会の機業染色講習は、二回（一八九九―一九〇〇）長野市

で開催され、県下各郡でも伝達講習が行われた。受講者は
二八六四人、備付器具は三六九台に達し、補習科に機業と染
色の二科目が設けられるようになった。上伊那郡赤穂尋常高

等小学校長に転任し、福沢泰江村長と協力して赤穂農工補
修学校、赤穂染織学校（現赤穂高等学校）を創設している。

○五年退職後、ハワイに渡り、ホノルル日本人小学校に勤め、
一一年帰国し、丸子町長に就任している。

実学教育を通じて地域の教育・産業の基礎を作り、さらには、
町政に携わり、その発展に尽くした先覚者である（1）。「表」を
作成した丸子学校長時代の教育についても、次のような特徴が指
的されている（『丸子町誌』一九九二年 一五八―一五九頁）。

1. 児童の実生活をただす民主的な学級経営の芽生え

① 挙手の法を取り入れる

② 問答による校訓の習慣化（わかり易い具体的な言葉）

③ 教室日記簿（現在の学級日記）

2. 教授法のくふう

① 修身科―模範人物を選定して、その人物の一生を具
体的に教えた

② 国語科「読書」―漢字と仮名を交互に印刷して練習

③ 国語科「綴方」―模範文の朗読、作文掛図の製作、方

言集の印刷（2）、

④ 国語科「習字」―自分の姓名・家族の名前・地域の具
体的な名称などを習う

⑤ 歴史科―郷土の人物に学ぶ

⑥ 理科―実験観察を綿密に行う

⑦ 地理―小県郡高低地図を作ろうとした

⑧ 図画科―地元の画家土屋泉石を講師として、毎月一
回、毛筆画の講習。

子どもたちの身のまわりのもの、地域の歴史・文物を最大限に
活用しようという姿勢が顕著である。このような発想のもとに、

「表」も企画されたことがうかがわれる。

二、資料の紹介

最初に、「表」の書誌的事項を記す。

和紙・両面刷り。

大きさ…一六・二×三六・二cm(縦×横)

構成・縦書き。表は、三段構成で、「言葉小縣郡(丸子學校・

丸子村)・郡 學 村」の枠取り。三段目は、記入欄。

配列…(表面) 人体名称一語・動物名称一九語・植物名称

一三語・物品名称一八語

(裏面) 雑言四六語・区別なき音の記入欄・(趣意書)

*架蔵のものには、両面にわたって(すべてではないが)

記入欄に書き込みがある。記入者の詳細(特に語の採集地)

がわからないのが惜しまれる。

具体的な語彙(翻刻・後掲)の検討については、次章にまわし、

「表」裏面の末尾にある「趣意書」(仮称)について検討する。

茲に集めたる俗言及方言は山間僻地の無學者流が多く稱ふる

言葉にて上等社會の用ふるものにあらざるなり今や兒童乃交

際頻繁にして言語益疎漏に流るるの傾向なり故に其大略を集

め吾が信愛する全窓諸君の贊助を得て縣下乃言語を對照し前

陳乃憂を防がんとす乞ふ記入の勞を惜むなくんば幸甚

記し置きたる假名は正しきものにあらず故に記入せらるる

諸君も發音乃ままを記しあらんことを望む不日印刷の際大

家の閱を乞ふ精神なり

長野縣小縣郡丸子學校

明治二年十一月十六日

柴崎 虎 五 郎

明治前半期にあつて、後半の国語教育の状況(標準語勵行運動・

方言撲滅)を先取りする面も感じられるが、まずは、広く長野県

内の実態をつかむために、同窓生への呼びかけがなされている。

柴崎のもとに、記入済みの「表」がどれだけ集まったのか。そ

して、実際に「大家の閱を乞ふ」て、「印刷」が実現できたのか、

興味がわく(後述・四章に続く)。

三、語彙の検討

まず、共通語形(「表」では、「言葉」と俚言・訛語(同「俗

言及方言)とが反対になっていると思われる例が散見される。

□ 人体名称…ほぞくへそ・のんどくのど

□ 物品名称…あんどくあんどん

□ 雑言……ありくゝあるく・なきるゝなくる・いまそつと
ゝもつと

次に、古語との対比になっている組み合わせが混じっている。

□ 動物名称……けものゝけだもの

□ 雑言……あしこゝあすこ

このほか、へび（動物名称）は、同形があがっている。

以上のような難点もあるが、「俗言及方言」に挙げられた例語は、タイムカプセルとなって、当地の往時の語形・発音の一端を伝えてくれる貴重な資料である。

個々の語詞では、「いも」に対して掲げられた「まるいも・上州いも」が興味深い。丸子を含む東信では、サトイモを意味する。中信の東筑摩郡では、「まるいも」と言えば、ジャガイモのことである。

四、今後の課題

柴崎の方言研究については、彼自身の言葉が記録されている『丸子中央小学校百年史』一九七三年 二五〇頁）。

方言 各地皆方言あり然共教育の進歩に伴ひ漸次改良せら

るるはしぜんの勢なり余は明治二十一年五月七日丸子地方の方言を集めて之を印刷に附したるは抑も県下方言印刷の始めならん又自費を以て印刷したるもの始とす其後二次の印刷品を配附して県下各郡の有志に記入を乞ひ更に三次の印刷を為さんとするに当り如此き事業は軽率すべきものにあらざるを信じ終生の事業と定め各地より寄贈の方言は一表に製して之を篋底に蔵し置きたるを以て他日の大成を期せんとす其後二四年七月知事より方言調査を差出すべきの命あり依て直に進呈せり

この記述から、以下のことが知られる。

① 「丸子地方の方言」（仮称・明治二年五月七日）の印刷（二次印刷）をした。

② 続けて、二次印刷をして、県下各郡の有志に記入を乞うた。（明治二年一月一六日。本稿の「表」が、これに当たると思われる。）

③ さらに、三次印刷を計画したが、軽率なまとめはできな
いと判断した。そこへ、明治二四年七月、県知事からの
方言調査の命があり、二次印刷の際に集まった方言をま
とめておいたものを提出した。

以上から、今後の課題として浮かび上がるのは、次のとおりである。

- ① 明治二二年五月七日印刷の「丸子地方の方言」の現物探査。
- ② 「丸子地方の方言（二次印刷）」と「表」（二次印刷）の異同についての調査。

- ③ 明治二四年の方言調査の現物は、長野県立歴史館に所蔵されている。また、柴崎自筆の「雑綴」の中には、「郡的方言」として上小（上田・小県）の方言（単語）が列挙されている（3）。

この両者と、一次印刷・二次印刷との対照が最終課題となる。

なお、明治二四年の方言調査の際に、柴崎と同様の例が長野県内にあつたのか、気になるところである。

さらに、柴崎の調査の最終的なまとめとなつた「明治二四年の方言調査」（県知事官房の通牒による）の全容についても、明らかにしたい。この調査は、明治一九年に内務省地理局が取調に使つた千葉県安房国の方言を例として印刷配布し、参照させている。長野県単独の事業なのか、全国的な動きのものなのか（とすれば、その実施状況・調査結果の保存状態は？）、など、派生する疑問も解いていきたい。

【注】

1. 製糸会社・依田社を創立（明治二二年）し、丸子地域を器械製糸の町に発展させた下村亀三郎の恩師は、柴崎であり、また下村の助力者でもあつた。

2. この「方言集」は、本稿の「表」以前のこと（明治二二年五月七日・四章参照）と思われる。

3. 『丸子中央小学校百年史』一九七三年 二五〇～二五一頁。可能ならば、本書に紹介の「柴崎家文書」を閲覧したいものである。

【参考文献】

- ・『丸子中央小学校百年史』（丸子中央小学校百年史刊行会（長野県小県郡丸子町丸子中央小学校内） 昭和四八年一〇月）
- ・『丸子町誌 歴史編 下』（丸子町発行 平成四年三月）
- ・中村一雄『信州近代の教師像 続』（東京法令出版 平成七年九月）

◆『長野縣方言對照表』（明治三二（一八八九）年）◆

「言葉／郡村」 「小縣郡丸子學校 丸子村」 「郡／學校 村」

□人体名稱 俗言及方言

ひたい	ひてくち	へび
ほう	ほうつべた	けもの
くちびる	くちべた	うぐひす
まゆげ	まえげ	にはとり
した	へら	ほたる
ほぞ	へそ	かに
ゆび	えび	かひこ
あし	子供に用ふ	うま
しりのはた	しりつべた	いぬ
まへかみ	めへかみ	つばめ
のんど	のど	かはからす
		かへる
		せみ
		はへ
		とんぼ
		あとさりむし

□動物名稱

ざこ じゃこ

たぬき

たのき

とび

とんび

□植物名稱

くぬぎ

くのき

ささげ

ささぎ

たいこん

でいこ

かひき

けいき

にんじん

ねんじん

きせる

きせろ

ごぼう

こんぼう

さいふ

せいふ

めし

おまんま

たらひ

たれひ

よもぎ

もぐさ

ゆみ

いみ

たばこ

たばこ

ひばし

しばし

げんげ

ほうねんくさ

うこん

おこん

もろこし

とうもろこし

ざうり

じょうり

じやがたらいも

かひたいも

もとゆひ

もてひ

いも

まるいも○上州いも

あんどう

あんどん

すりいも

ばかいも

ぶたい

ふてい

□物品名稱

さみせん

しやみせん

あそぶ

あすぶ

ふんこ

ふんこう

さびしひ

さむしひ

かまど

へつつい

とくに

とつくに

けんくわん

けんくわ

ありく

あるく

ひも

ひぼ

をしわる

をさる

ひとすぢ

ひとひづ

かはゆし

かはいい

てぬぐひ

てのげひ

こればかり

これつきり

□雑言

おもし	よもてい
つめたし	つべてい
うつむく	うつつむさめ
じゆつなし	せつねい
いたたく	おんくれ
のせる	いっける
なきる	なぐる
うつ	ぶつ
はたらく	かまける
たたく	くらせる○どうづく
よろしい	ゆるしい
あたたか	のくとい
おほきい	でかい
はひる	へひる
たいそう	いらい
でまかせ	でほーでー
たれ	どいつ
こやつ	こいつ
あち○こち	あっち○こっち
ただ	たった

あまり	あんまり
いまそつと	もつと
あしこ	あすこ
あれほど	あらほど
そのやうな	そんな
このやうな	こんな
うろ	ねな
ごちそう	ごつそう
そらこと	そらつこと
うらやまし	うれーましー
おどろく	おとける
たまきる	たまける
たいがへ	ていげへ
しほから	しほっぱい
これら	ころり
いきたわし	いきとうし
やまひ	あんべわるい
父を呼ぶ	とーさん おとっさん
人を呼ぶ	(生徒) おい
其地に區別なき音	いえる多區別なし